

香取郡山田町所在性学墓の測量調査報告

栗田則久

Report on a Survey of Sei-gaku Graves Situated in Yamada-machi, Katori-gun

はじめに

① 山田町府間所在性学墓の位置と歴史的環境

② 測量調査の成果

結び

【論文要旨】

大原幽学によって、天保年間に下総地方東部の農村を舞台に展開していった性学という思想については、先学諸氏によって研究されてきたところであるが、この思想が在地の伝統的習俗である墓地にどのように反映しているか、山田町府間地区に所在する婦命台地区・小日向地区二か所の性学墓の測量調査を通してみると、村の伝統的墓制に適合していくという意識はなかったようである。両地区に共通する長方形を意図した規模の大きな土塁築造、性学型墓石の採用、男女を区別した埋葬など、それまでの村の伝統的な墓地にはみられない独自の新しい葬制を採り入れている。そこには、村の中での性学の合理的思想の浸透とはまた違った意味で、墓制という伝統的習俗までは踏み込むことができなかった一側面が存在していたことが考えられる。

はじめに

大原幽学の説く性学は、家や子孫の永続を目指す家族重視の立場からの啓蒙主義思想であり、その実践は、農作業から日常の生活規範にまで及び、大人や子供、男女を問わずに指導した。性学が受け入れられる背景には、上層の農民である村役人レベルが、自村の経営に性学が有効であると判断したことが想定され、積極的な関与を持って次第に農民の間に浸透していった。

しかし、彼の行った合理的な思想と村の伝統的な習俗との間には、何らかの確執が存在したことも考えられる。これまで、社会経済的な側面や知的な部分での研究が中心となっていたのに対し、村の伝統的習俗の中にどのように入り込んでいったのかを考えることも重要である。そこで、村内での変革がかなり難しいと思われる墓制に注目して調査を進め、性学墓のあり方を浮き彫りにすることを目的に測量調査を実施した。

今回は、当時の状況を比較的良好に現在まで残している香取郡山田町府間に所在する婦命台地区と小日向地区の二か所の性学墓を対象に測量を行い、その実態を把握するとともに、時代の流れに伴って急激に当時の姿を変えつつある状況が進展していることから、測量図として将来に保存しておくことも今回の研究の中では重要な目的である。

① 山田町府間所在性学墓の位置と歴史的環境 (図1)

性学墓の所在する香取郡山田町は、下総台地の北東部に位置し、小見川町・干潟町・多古町・栗源町等に囲まれている。府間地区は、山田町の東部、小見川町との行政境近くにあり、婦命台の性学墓は、利根川に流れ込む黒部川最奥部の台地先端部に立地し、北側に広大な水田地帯を

望む。一方、小日向に所在する性学墓は、婦命台の南側3kmほどにあり、栗山川から東に延びる支流によって樹枝状に開析された小支谷奥部の平坦な台地上に位置し、南側には椿海の広大な干拓地が広がる。干潟町長部に現存する大原幽学の生家とも至近距離にある。

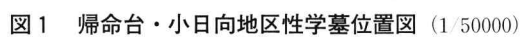
現在の山田町の町域に該当する江戸期の村々は、府間をはじめとする一八か村で、その戸数は、一八四五(弘化二)年で、合計一二六五軒、そのうち府間村は二〇七軒を数え、群を抜いた戸数である。また、府間村は小見川から旭・八日市場方面へ向かう道の宿場町として栄えていた。江戸期以来の村々は、明治二十二年の市制町村制により、府間村・八都村・山倉村として成立し、府間村は、大正十四年町制を施行、昭和二十九年に一町二村が合併して現在の山田町が誕生した。

② 測量調査の成果

(1) 婦命台性学墓 (図2、表1、写真1・2)

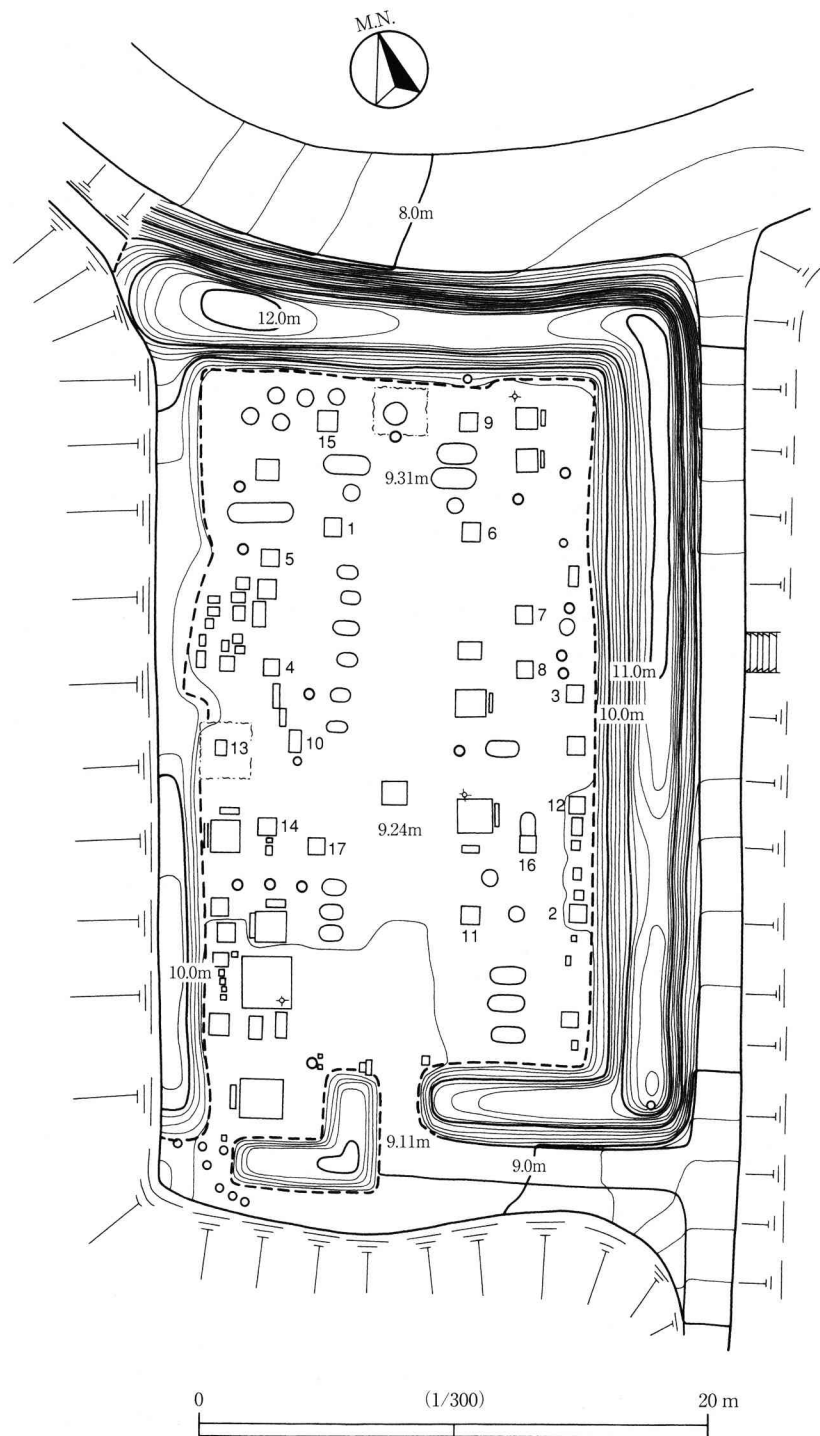
婦命台に所在する墓地群は、性学墓・共同墓地・青年館前墓地と三つの区域に分かれている。共同墓地は、墓石がほとんどなく、土饅頭と卒塔婆が多かったが、現在は集合墓(家墓)が立ち並び、急速に状況が変化している。青年館前墓地は、墓石が密集して建立されており、かつては、共同墓地の詣墓として機能していたようであるが、現在は卒塔婆の立つ土饅頭がみられる。

一方、今回調査対象とした性学墓の区域は、前述の二区域とは全く異なった印象を受ける。南側と西側は、急峻な崖によって区切られ、北側と東側は人工的に掘削された道路によって区画されている。その内側に沿って、性学墓に特徴的な土塁が長方形形状に巡らされ、南側中央部には、幅〇・七mの出入り口となる通路が設けられている。南側土塁の西側は、L字状に土塁が造られているが、この部分は他に比べて小規模であり、



後世に造り替えられた可能性が高い。本来は通路を挟んで直線の土塁が延びていたようである(図6)。また、西側の土塁は見かけ上狭くなっているが、崖崩れによって西端部が流失してしまったものと考えられる。全体の規模は、土塁外側で南北長三五m、東西長二二m以上を測る。土塁の幅は、北側と東側で約四m、南側で約三mを測り、南側が若干狭くなっている。見かけ上の高さは、内側の平坦面から最も高い北東コーナー部分で三m程である。西に向かって徐々に低くなっており、西側では平坦面から一m程度となる。土塁内部は平坦で、南北長約二七m、東西長

一五m、面積四〇五m²を測る。土塁は丁寧に整形されており、崩れはほとんど認められない。土塁の現状と周囲の地形を考えると、本土塁は、土を積み重ねて高くしたのではなく、緩やかな斜面を削り出す方法で築造されたものと思われる。周囲の道路と土塁内部を削平し、見かけ上非常に高い土塁が意図的に形成されている。内部には、現代の石碑や土饅頭などとともに米谷氏により指摘された性学型墓石が混在した状況で確認される。性学型墓石と認められるもの



方位は磁北を示す。
高さ(単位 m)は、任意の高さから計測したものであり、標高を示していない。
算用数字は、性学型墓石の番号で表1の番号と一致する。

図2 帰命台地区性学墓測量図

表1 帰命台地区の性学型墓石一覧

番号	規 模				銘 文	左 側	西 暦	性別	備 考
	総高	柱高	頂上高	柱幅					
1	一一〇・二	五八・二	二・七	二二・五	明治二十年丁亥三月三十一日 貞信院容譽勇操大姉	舊幕府徳川氏臣 北角十郎兵衛脩明妻富見氏壽子 行年五十九	一八八七	女	
2	一二〇・三	五八・八	二・八	二二・五	明治二十一年戊子三月六日 洗心知道清信士	小見佐川吉蔵行年五十三	一八八八	男	
3	一二九・九	五八・四	二・九	二二・五	匡性院澄意居士	静岡県士族春重弟 入江新次郎春因行年三十八	一八九〇	男	
4	一一六・四	五八・四	二・九	二二・五	顯操院志道妙容大姉	舊幕徳川氏入江春重叔母 入江一行年六十七	一八九〇	女	
5	一二三・七	五八・二	二・七	二二・五	誠心院恭學妙道大姉	舊幕徳川氏臣北角脩立妻 佐藤氏安子行年二十七	一八九〇	女	
6	一二二・一	五八・一	二・六	二二・四	篤行院庸善備居士	岡田新左衛門勲備行年七十二	一八九一	男	
7	一一五・一	五八・一	二・六	二二・五	遵機玄空居士	海上郡滝里村遠藤茂兵衛 行年六十三	一八九二	男	
8	一〇六・六	五五・六	二・六	二二・五	眞應院玉岡麓山居士靈位	無し	一八九四	男	
9	一一二・七	五八・二	二・七	二二・五	觀見院烈譽靜諸居士	長門國阿武郡柴福村山口懸士族 白神源助美春行年四十	一八九五	男	
10	五五・九	四七・九	二・四	二二・〇	■靜恭院貞潔妙大姉靈位	無し	一八九七	女	元来の台石はなく、転用 台石に柱のみ建てる
11	一二五・二	五八・二	二・七	二二・五	博玄道顯清居士	山路武助行年四十八歳	一九〇〇	男	
12	一一二・七	五七・七	二・七	二二・〇	平等院寛壽道圓居士位	無し	一九一三	男	
13	九八・九	四八・四	二・九	一九七	■慈性院節義妙英大姉	大正十五年十一月建之 小川孝太郎	一九二六	女	頂上は兜巾ではなく伏皿 状、下から二段目に「小 川」と陰刻する
14	一一五・四	五七・九	二・九	二二・〇	梅芳壽圓清大姉位	無し	一九二八	女	
15	一三九・四	六一・四	三・四	二三・七	深法院殿妙解日如大姉	昭和二十八年八月東京都台東区 三輪町四十番地伊藤源三郎建之	一九五三	女	台石が四段
16	一三〇・五	五九・五	四・〇	二二・〇	福善院圓空學平信士	昭和三十六年三月 菅谷作蔵建之	一九五九	男	
17	一二九・七	五八・七	四・二	二二・〇	寂光妙月清信女位	昭和三十六年三月 菅谷作蔵建之	一九六一	女	下から二段目に「菅谷」、 三段目に家紋を陰刻する

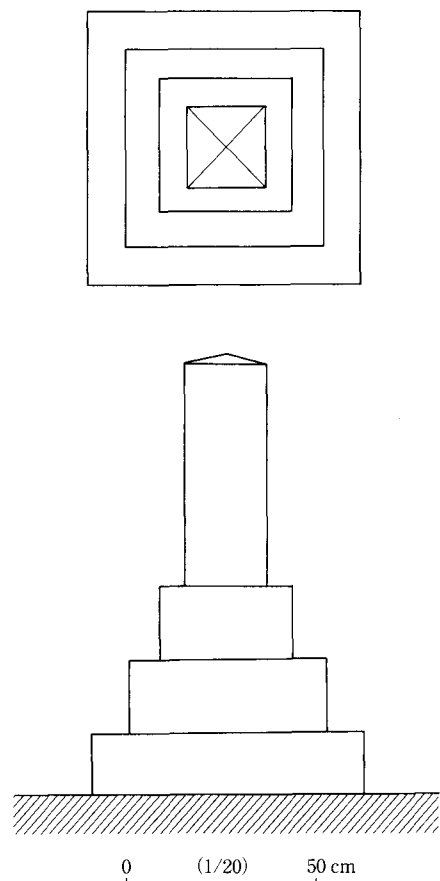


図3 標準的性学型墓石模式図

すると、4と3、8と10が対となっていた可能性が高く、8と3が後世に移動させられたことが想定される。このように、婦命台の性学墓については、当初からその配置等にある程度の規制が存在したようである。

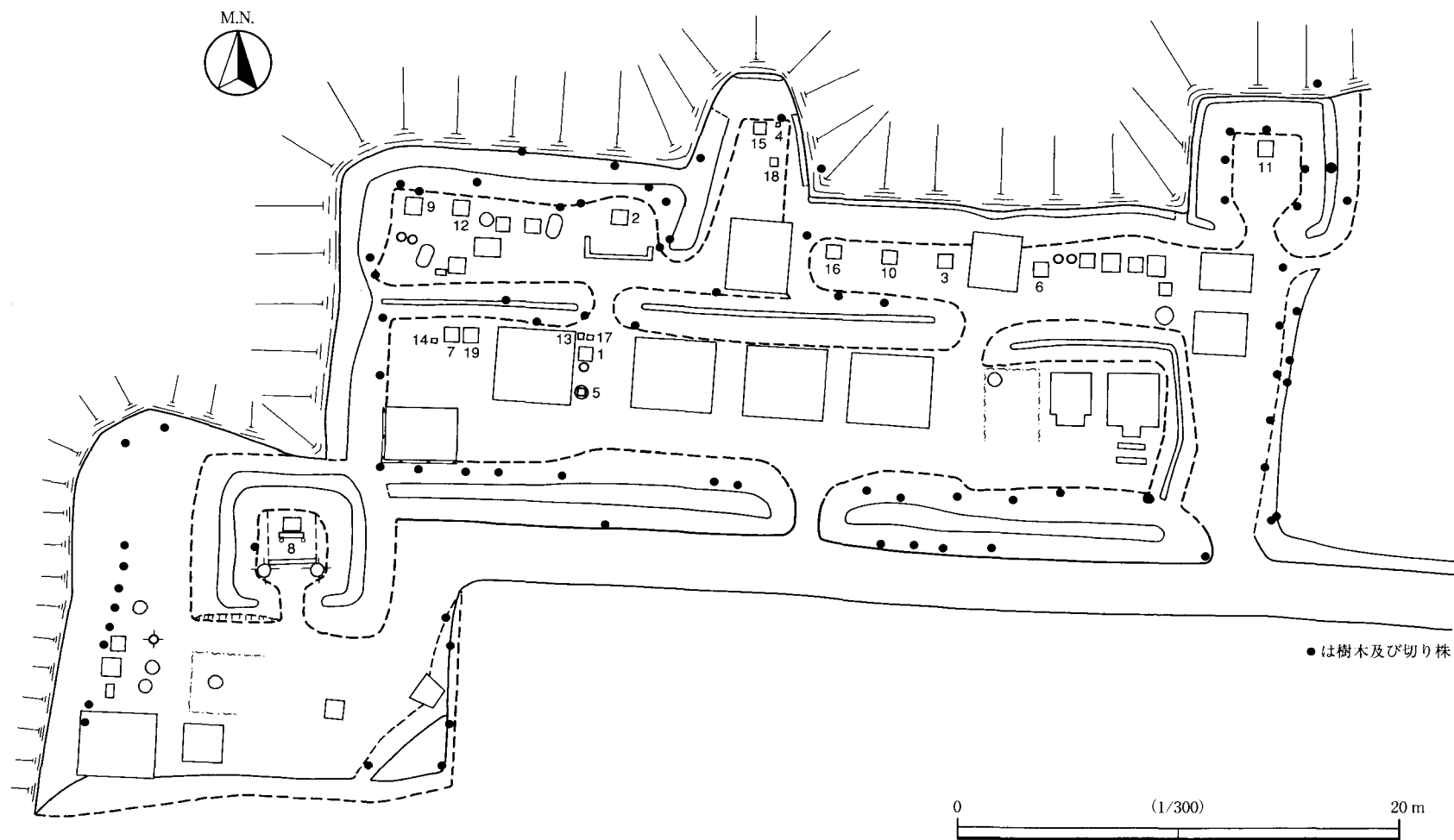
(2) 小日向性学墓 (図4、表2、写真3・4)

小日向の性学墓は、干潟町との行政境に隣接する小日向地区南端の初音台に位置する。性学型墓石以外に土饅頭や現代の集合墓が混在しているが、婦命台ほど土饅頭の数は多くない。一方、現代の集合墓は多くを占めており、これに伴う性学型墓石の配置や土塁の改変があったものと考えられる。

には、共通する形がみられる。台石を三段積み重ね、その上に先端部が角錐状に尖った四角柱を載せる形態である(図3)。これは、後述する小日向地区の墓にも共通するものである。このような形態を持つ婦命台の性学型墓石に注目してその配置をみると、ある程度企画性が窺える。その中心には、北端中央に位置する横垣に囲まれた区画がある。これは、三代目教主石毛源五郎の墓とされ、土饅頭のみで墓石が建っていない。墓石と土饅頭の区別があったかどうかは明らかではないが、銘文からみると、遠来の門人に墓石を建てる傾向があり、地元門人は従来からの地元の埋葬方法である土饅頭形態を採用した可能性が考えられている。また、西端中央部に一三のやはり横垣で囲まれた性学墓が建立されている。頂部が角錐状ではなく皿状となっている点、他とは異なるものであり、何らかの区別があったのかもしれない。以上の二か所が横垣で囲まれているが、他は性学型墓石のみである。北端中央部の教主の墓から出入り口部中央まで引いたラインの両側にはほぼ左右対称形となるように墓石が並んでいる(図6)。さらに西側には女、東側には男という区別がなされている。また、相対する男女が対となる傾向がある。この中では、西側の4と10、東側の8と3が対称形とはなっていないが、銘文の内容から

東西に長い長方形の土塁に、北東コーナーと南西コーナーにほぼ正方形の土塁が付設され、北辺中央付近に北側に突出部が延びている。規模は、長方形部分の土塁外側で、東西長約四〇m、南北長一六・一七mを測る。土塁の遺存は比較的良好で、旧状を良く残す南辺で幅二・三mである。土塁内部は、東西長三六m、南北長一二m、面積四三二mを測る。また、中央よりやや北側に寄って内部を分断するかのようには東西に走る土塁が二か所の通路部分を残して築造されている。北東コーナーと南西コーナーの正方形の土塁は、南辺中央に通路があり、ほぼ同様の規模で築造されている。中でも、8の性学墓に伴う土塁は旧状を良く残している。通路の西側が若干削平されているものの、土塁外側で南北長八・二m、東西長九・一mを測る。土塁の幅は三・〇m、高さ一・一―一・五mと北側がやや低くなっているが、地山が南側に若干傾斜しており、頂部の高さを水平にするための所作と思われる。

小日向の土塁は、婦命台と比較すると、高いところでも一m弱と全体的に低くなっているが、これは、その築造方法の違いが一つの要因となっ



方位は磁北を示す。
 高さ（単位 m）は、任意の高さから計測したものであり、標高を示していない。
 算用数字は、性学型墓石の番号で表 1 の番号と一致する。

図 4 小日向地区性学墓測量図

表2 小日向地区の性学型墓石一覽

番号	規 模			右 側	銘 文		西 曆	性別	備 考
	総高	柱高	頂上高	柱幅	柱奥行き	正 面	左 側		
17	四・五・一	三・七・六	一・六	一四・〇	一四・〇	新見正壽次男平次郎行年二才	幼見善童子	明治二十九年三月十五日	一八九六 男 台石一段
16	一一・二・一	五・八・一	二・六	二一・五	二一・〇	明治二十八年乙未十月十五日	顯性院嚴譽則惠居士	下埴生郡長沼村成毛五郎兵衛則惠行年九十	一八九五 男
15	一〇四・二	五・七・七	二・五	二一・四	二一・四	明治二十四年辛卯四月十一日	是心院真行妙如清信女	匝瑳郡榮村堀川椎名九郎右衛門妻登久行年七十四	一八九一 女 台石一段目は埋没
14	四四・二	四四・二	一・二	一一・二	一一・二	明治二十年己丑一月建立	五木田寄義翁生齒塚	無し	一八八九 男
13	五〇・九	三四・四	一・九	一五・三	一五・二	明治十八乙酉八月二日	順理正道善童子	舊幕臣新見正壽長男正男行年六才	一八八五 男 台石一段
12	一一・六・八	五・八・一	二・六	二一・五	二一・五	明治十八乙酉季七月十二日	修善院性達妙讓清大姉	諸徳寺邸六世菅谷亦左衛政與妻杉寄氏由喜子行年六十四	一八八五 女
11	一一・八・五	六四・五	三・五	二四・五	二四・五	明治十八乙酉季五月三日卒	覺玄院殿義以正之居士	東京北豊島郡日暮里村住宮田正之行年五十六	一八八五 男
10	一一・三・一	五・八・二	二・七	二一・三	二一・五	明治十八乙酉季一月一日	實成院台林道光居士	埴生郡龍角寺村大野勘左衛門則義行年七十一	一八八五 男
9	一一・四・五	五・八・〇	二・五	二一・五	二一・五	明治十七年甲申年十一月十六日	眞成院妙道梅壽□尼	宮田正之實母谷氏梅壽行年八十一	一八八四 女 灯籠を一組備える
8	一二・〇・六	五・八・一	二・七	二一・二	二一・四	明治十七年甲申年八月十四日	性仙院賢譽妙輝大姉	石毛元仙妻菅谷氏良子行年六十三	一八八四 女 三方を土塁で囲み、玉石を敷いていた跡がある
7	一二・二・二	五・七・七	二・七	二一・二	二一・二	明治十六癸未年三月五日	諸性大心居士	石出村清水權右エ門三男五木田氏養子權三郎墓行年二十八	一八八三 男
6	一〇二・一	五・七・一	二・一	二一・〇	二一・〇	明治十二己卯年八月二十二日	馨學猛麟居士	相模國足柄下郡成田村夏目麟兵衛四十歳	一八七九 男 台石一段目は埋没
5	一二・七・六	五・八・一	二・六	二一・五	二一・〇	明治十一年戊寅年五月七日	隨谷妙賢清信女	渡邊幸之助旧家来神谷慶之助妻フテ行年四十三	一八七八 女
4	三九・二	三九・二	一・二	二一・二	二一・二	明治九年丙子十月二十八日行年二十(埋)	斎女掛巢佐多子之毛墓(埋)	無し	一八七六 女 台石なし
3	一〇九・二	五・八・二	二・七	二一・五	二一・五	明治七甲戌十一月六日	光善院性圓淨明居士	西大須賀村四ツ谷石上兵右衛門政□行年六十一	一八七四 男
2	一三二・〇	六・五・〇	三・五	二四・〇	二四・〇	明治辛未年九月二十一日卒	教戒院殿外譽別操妙傳大姉	松平三郎次郎康長女俗称村瀬行年五十四歳	一八七一 女 玉石を敷いた跡がある
1	一〇九・六	五・五・六	二・六	二一・二	二一・五	明治三庚午年十一月八日	隆松院雪操妙薩大姉靈位	無し	一八七〇 女

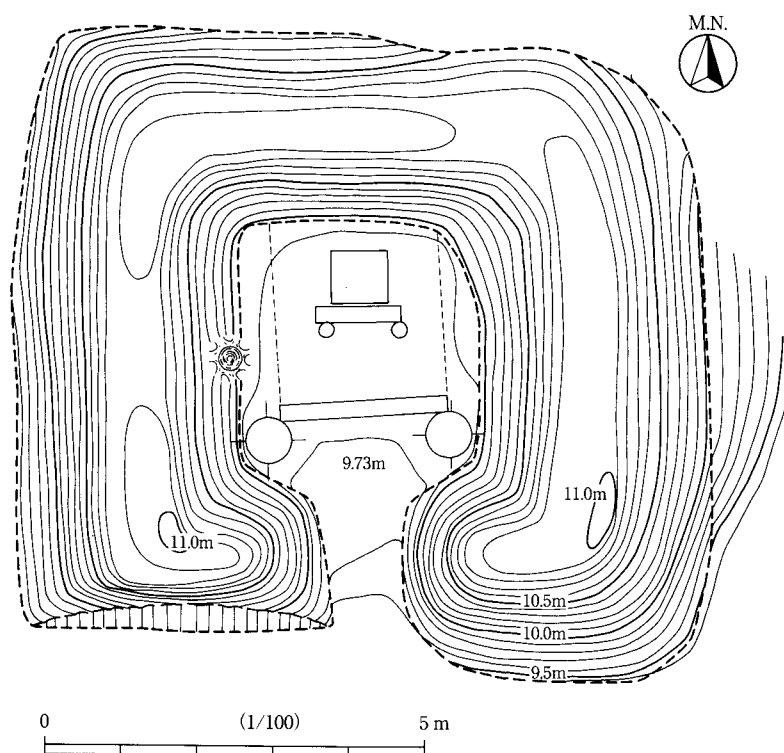


図5 小日向地区性学墓 No. 8 測量図

結 び

婦命台・小日向の二地区の測量調査をもとに、性学墓の特徴をみてきたが、ここでは、性学墓に付随する各要素をまとめておく。

土塁内部の性学墓の配置は、婦命台ほど明確な規制は認められないものの、内部区画土塁北側の西半部に女性、東半部に男性の墓石が並んでおり、これに規制されたかのように、周囲を土塁で囲まれた11は男性、8は女性となっている(図6)。このような状況から、小日向の性学墓についても男女の区別がある程度存在していたようである。区画土塁南側の墓石は、西側に集中しているが、本来の配置を示すものかどうかは不明である。その東側に広がっている現代の集合墓の建立に伴って移動してしまった可能性も考えなければならない。この区域に当初から性学墓があったかどうかは不明であるが、土塁の区画の存在を考えれば、この区域にも性学墓があった可能性が想定されよう。

19	18
七〇・四	九六・五
五六・九	六二・五
四・五	三・〇
一八・二	二一・五
一七・〇	二〇・五
小日向亀井家一世長男 俗名保夫享年七才 大正貳年五月八日卒	無し
諄性良善保童子	唯心院實成道喜清居士位
大正九年四月施主 亀井安三郎建之	大正七年七月五日 椎名喜三郎行年七十六才
一九二〇	一九一八
男	男
台石一段、現代の集合墓 に移設	台石一段目は埋没

土塁

二か所の性学墓に共通してみられる点の一つは、周囲を囲む土塁の存在である。明治元年の開設といわれる小日向地区、明治十年代開設の婦命台地区の開設当時の土塁をそのまま現代に残しているかどうかは測量結果のみでは判断できないが、いずれも長方形を意識した土塁築造がなされたものと思われ、婦命台のL字形の土塁や小日向の突出部は墓域拡張の段階で改変された可能性が強い(図6・7)。築造当初の規模は、婦命台が二七×一五mで、九〇×五〇尺、小日向は三六×一二mで、一二〇×四〇尺となり、小日向地区が一回り大きくなるものの、両者とも計画的に築造されたものである。

性学形墓石

土塁とともに両地区に共通する性学墓の大きな特徴として、性学型墓石の採用があげられる。台石を三段積み、その上に角錐状の頂部を有する四角柱を載せる形態を基本としている。両地区の年代順の総高及び各部位の規模は図8のとおりである。総高は、一段目が埋没しているものもあり、個々の状況でばらつきが認められるため、比較する対象としては適当でない。そこで、柱高と頂上高を比較してみると、両地区とも全体的にそれほど大きな差はなく、ある程度統一の企画があったものと思われる。小日向地区に四点小規模の墓石が存在しているが、これは、子供や毛・齒を埋葬したものであり、成人とは異なった扱いがあったのであろう。また、小日向地区の2・11・18は柱高・頂上高とも他に比べて一回り大きくなっている。11は三方を土塁で囲まれ、玉石を敷いているとともに、銘文に「院殿」が含まれている。2も土塁囲いはないものの、同様な状況である。「院殿」の意味は不明であるが、個人の墓を土塁で囲むという点は、婦命台地区の横垣で囲む状況と共通するものであり、他と区別する意識があったようである。

一方、墓石の时期的な変遷に注目してみても、法量的規制はある程度継承されているが、頂上高をみると、大正末期以降高くなる傾向がある。墓石に家紋や家名・建立者を加えることもこの時期以降みられており、墓制に対する意識の変化が伺われる。

性学型墓石の配置

性学墓の特徴の一つとして、埋葬位置の男女区別があげられる。特に、婦命台地区に端的に表れており、北端中央に位置する三代目教主石毛源五郎の横垣で囲まれた墓から入り口に向かって南北方向に引いた中央線の西側に女性、東側に男性の性学型墓石が配置されている(図6)。男女別埋葬の意識があったものと思われるが、どのような背景で成立したものは明らかではない。小日向地区には、婦命台地区ほど明確なものは認められないが、これは、前述したように墓地開設後、墓石位置の改変が行われた結果であろうと思われる。しかし、本来の配置を残していると思われる中央土塁北側に並ぶ性学型墓石は、中央から西側に女性、東側に男性と区別されている(図7)。婦命台地区・小日向地区とも西側に女性、東側に男性を埋葬するという状況には、何らかの意識があったのかもしれない。

山田町に所在する二か所の性学墓の特徴を測量調査等をもとに概観してきたが、明治元年開設と言われている小日向地区の性学墓で、性学型墓石や土塁囲み、男女別埋葬という新しい葬制が採用され、明治十年代の開設である婦命台地区に的確に継承されている。性学が、農村社会に浸透していった一方で、伝統的習俗である墓地に関しては、これまで在地になかった新しい葬制の採用により、独自の展開を意図していたのではなからうか。

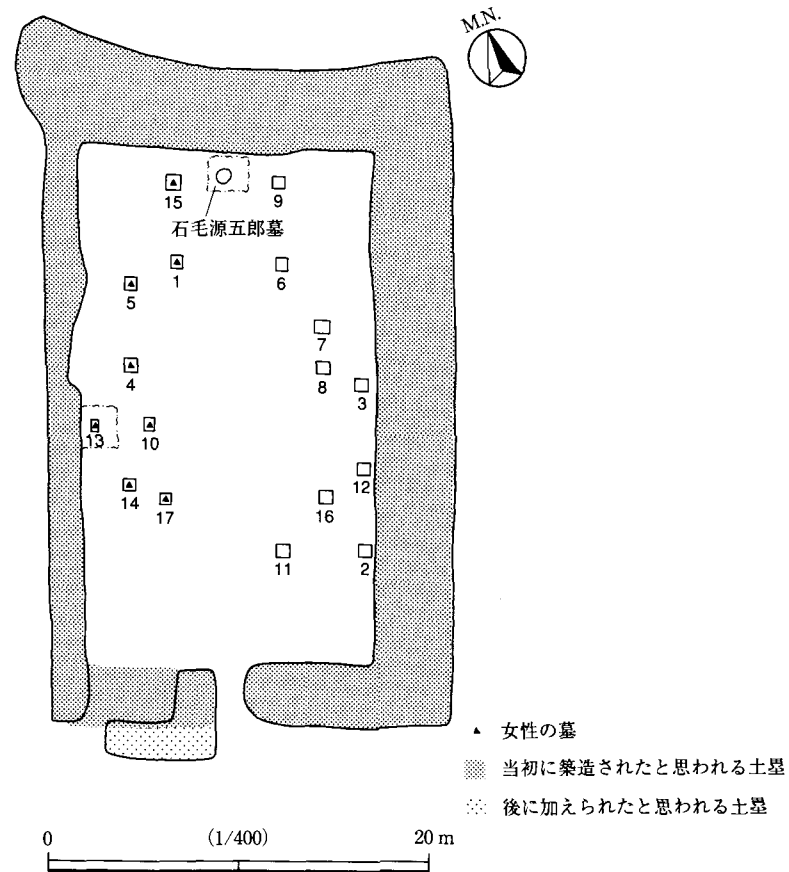


図6 帰命台地区性学墓配置図

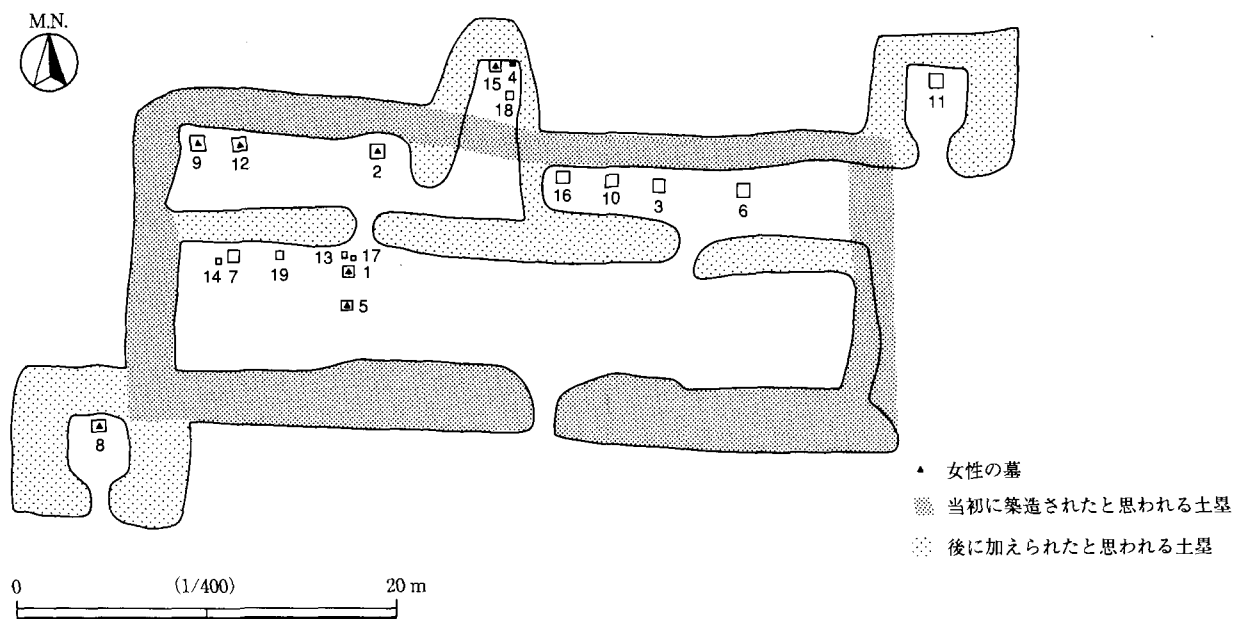


図7 小日向地区性学型墓配置図

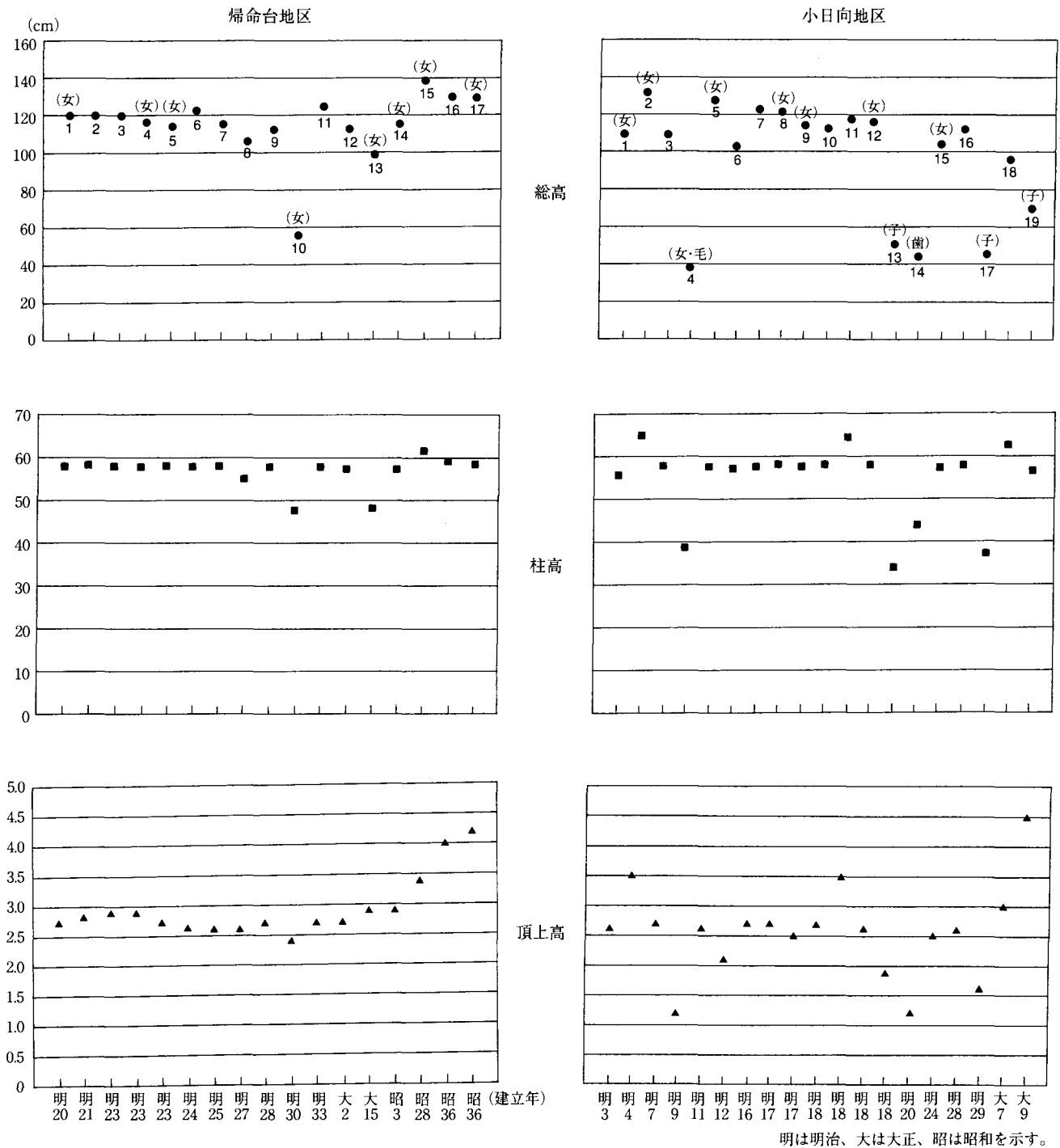


図8 性学型墓石総高・柱高・頂上高時代順分布図

補記

本稿は、平成十一年に、東総地域の基礎信仰をめぐる調査・研究の一環として実施した性学墓の測量調査の成果に基づく。性学墓の測量調査や原稿作成にいたるまで、今回の共同研究のメンバーである千葉県立房総風土記の丘米谷博氏に多くのご教示をいただくとともに、研究成果を活用させていただいた。ここに深く感謝申し上げます。

参考文献

米谷 博 一九九八「性学墓について 千葉県香取郡山田町の事例から(1)」『民具マンスリー』第30巻11号
米谷 博 一九九八「性学墓について 千葉県香取郡山田町の事例から(2)」『民具マンスリー』第30巻12号

(財)千葉県文化財センター、国立歴史民俗博物館共同研究員
(二〇〇三年五月二十三日受理、二〇〇三年七月十八日審査終了)

Report on a Survey of Sei-gaku Graves Situated in Yamada-machi, Katori-gun

KURITA Norihisa

A number of scholars have previously conducted research on the Sei-gaku beliefs that were developed by OHARA Yugaku in rural villages in the eastern part of the Shimousa region during Tenpo period (1830–1843). However, as a result of conducting an examination by means of a survey of Sei-gaku graves in the two locations of the Kimyodai quarter and the Kohinata quarter of Fuma district in Yamada village to determine in what way these beliefs are reflected in graveyards, a traditional custom, it would appear that there was no conscious attempt to fit in with the traditional village grave system. The same new system of burial was adopted in both quarters, which saw phenomena such as the construction of large-scale earthen mounds designed in an oblong shape, the adoption of tombstones in the Sei-gaku style, and the separate burial of men and women, things that until that time had not been seen in traditional graveyards. It is conceivable that in a different sense from the penetration of the practical beliefs of Sei-gaku among the village, there existed on one level something that prevented Sei-gaku from penetrating as far as the traditional custom of a grave system.

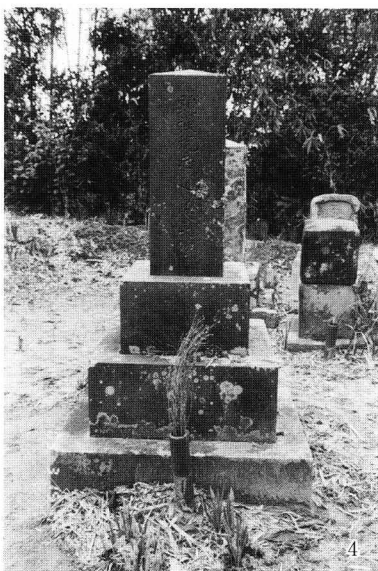
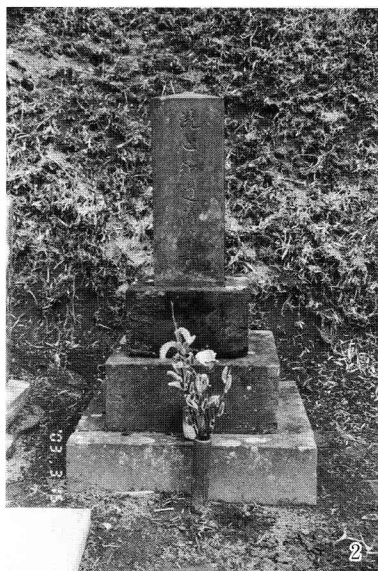
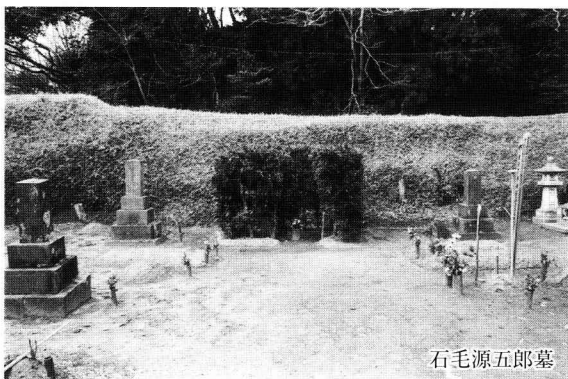


写真1 帰命台地区性学墓 (1)

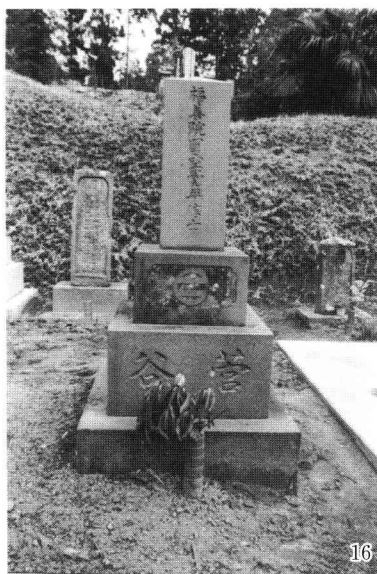
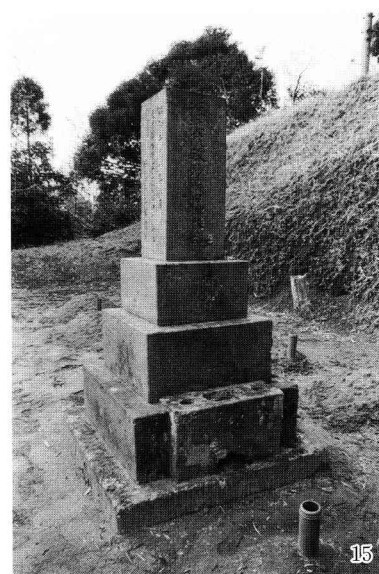
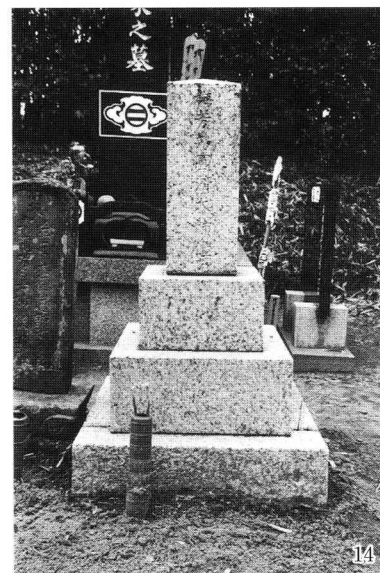
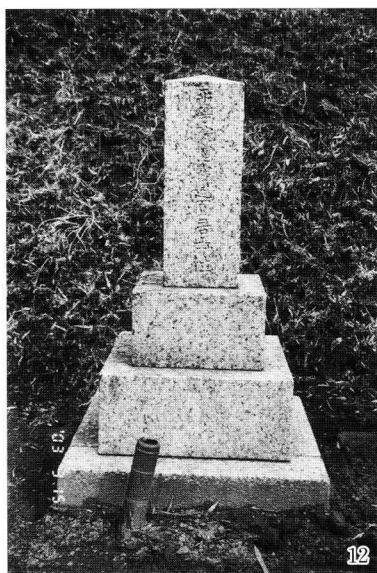
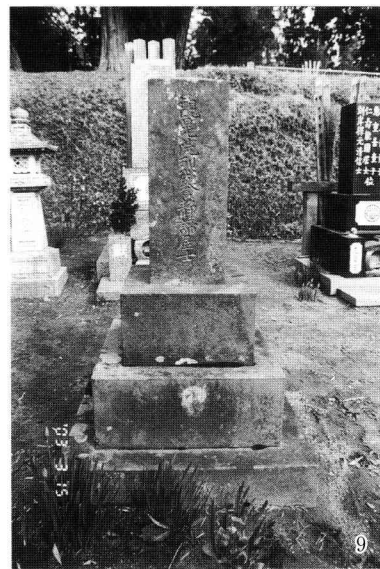
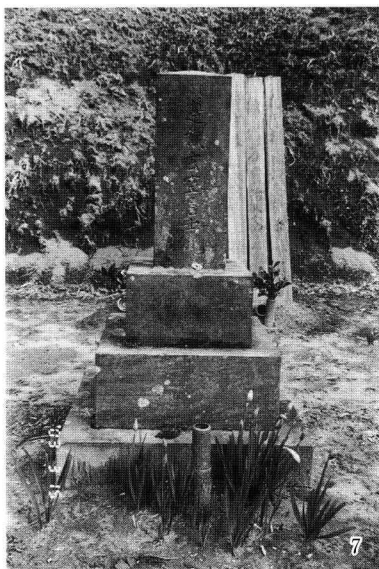


写真2 帰命台地区性学墓(2)

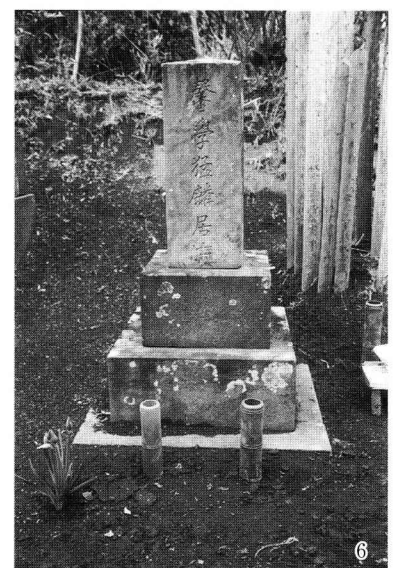
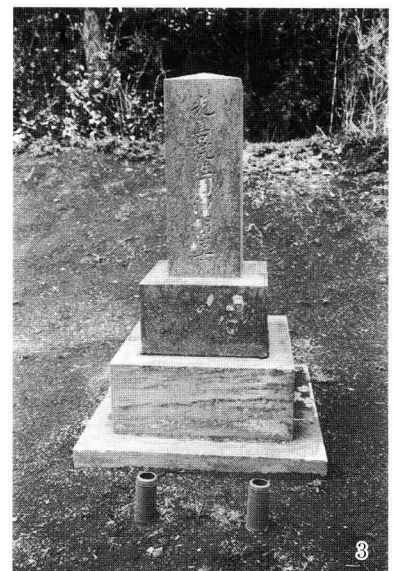
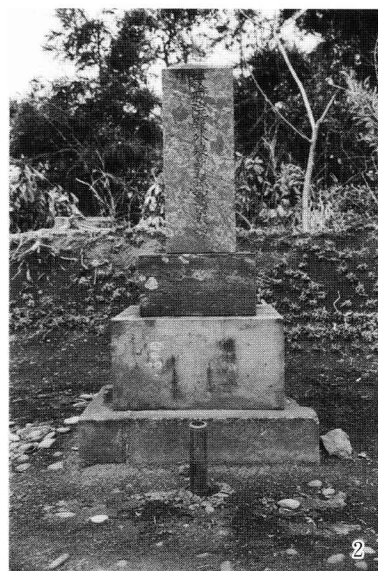


写真3 小日向地区性学墓(1)

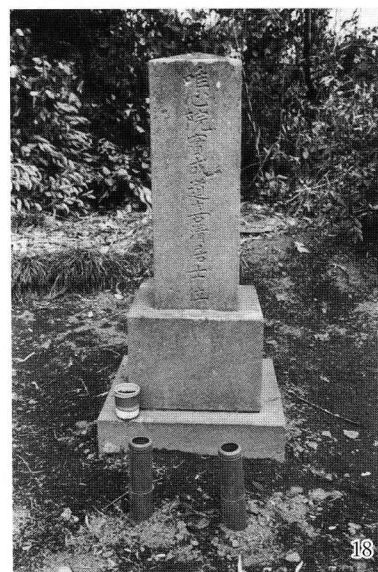
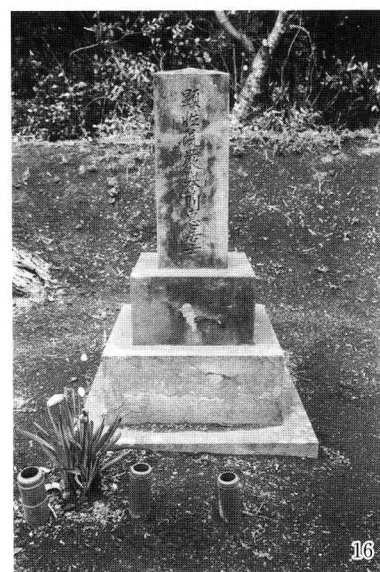
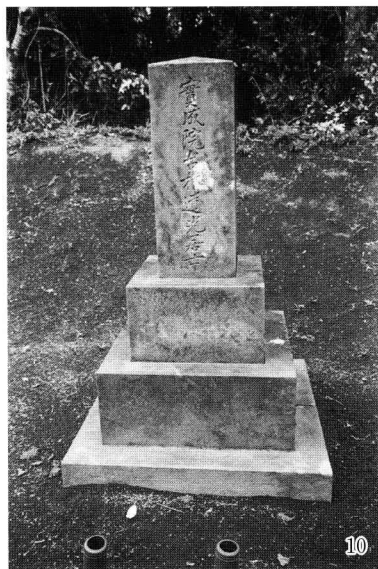
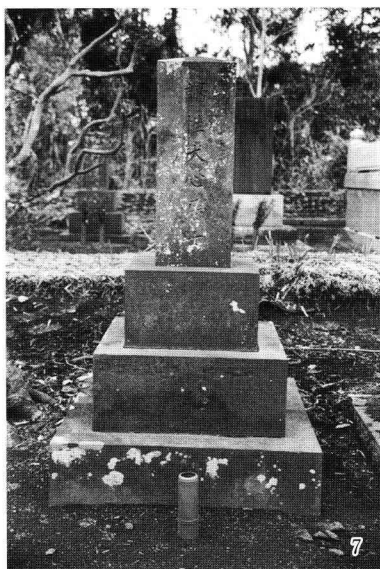


写真4 小日向地区性学墓(2)